日本グループ・ダイナミックス学会会報

ぐるだい JGDA ニュース

The Japanese Group Dynamics Association

http://www.groupdynamics.gr.jp/index-j.html

第３２号
（2007年8月10日）

発行所：〒464-8601　名古屋市千種区不老町
名古屋大学大学院教育発達科学研究科 吉田俊和研究室
日本グループ・ダイナミックス学会
e-mail: sec-general@groupdynamics.gr.jp
発行人：吉田俊和　　編集担当：西田公昭

《 目 次 》

§第54回大会（於　名古屋大学）のご報告　・・・・・・・・　1
♪第54回大会を開催して：吉田俊和
§本年度優秀論文賞決定　・・・・・・・・　2
♪優秀論文賞選考経過と結果の報告：松井豊
♪受賞者の声：尾崎由佳／河野由美
§第2回『優秀学会発表賞』決定・・・・・・・・　3
♪選考経過と結果の報告：村本由紀子
♪受賞者の声：原田知佳／橋本博文／清水裕士／吉澤寛之／五十嵐祐
§AJSPからのメッセージ：嘉志摩佳久・・・・・・・・　7
§事務局からのお知らせとお願い／広報担当からのお知らせ／諸連絡先　・・・・・　8

★★　第54回大会のご報告　★★

第54回大会を開催して

大会準備委員長　吉田　俊和（名古屋大学）

JGDA第54大会は、6月16日と17日の両日、名古屋大学東山キャンパスIB電子情報館で開催されました。梅雨時にもかかわらず、大会前日の常任理事会企画ワークショップを含めた3日間のみ天候に恵まれ、参加人数も272名と盛況でした。

9年ぶりの名古屋大学での開催でしたが、前回とは異なる小綺麗な建物で、しかも軽食コーナー付きの洒落た造りになっていたのには、驚かれた方も多かったと思います。総会並びにシンポジウム会場も座り心地の良い椅子になっており、予想以上にご満足いただけたものと確信しています。問題は、ハード面だけでなく、ソフト面でも満足していただけたかということです。スタッフ一同は頑張ったつもりですが、「参加してよかった」と思っていただけるような運営に徹することができたかどうか一抹の不安も残っています。

発表数は例年並みでしたが、昨年より始まった優秀学会発表賞の効果か、発表そのものが、幾分評価を意識したポジティブ方向への偏りが見られ、良かったのではないかと思います。また、初の試みとして、最近学位を取得された若手研究者の小講演を企画いたしました。狙いは、各大学でどのような人達が学位を取得し、その内容はどうなのかを公開することで、大学院生の励みになればという期待から実施いたしました。発表数は3件でしたが、どの発表にも多くの参加者があり、意義があったと思います。

最後に、大会を支えてくださった常任理事を始めとする関係者の方々に感謝するとともに、次回の開催校である広島大学にバトンを渡したいと思います。

★★　本年度優秀論文賞決定　★★

優秀論文賞選考経過と結果の報告

審査委員長　松井 豊（筑波大学）

優秀論文賞の選考は以下の手続きで行われた。選考委員全員が、実験社会心理学研究第45巻１号２号に掲載された全13編の論文を審査対象として、優秀論文賞候補にふさわしい論文３編以内を選び、１～３位の順位をつけて事前投票した。この投票の結果は、１位論文３点、２位論文２点、３位論文１点として得点化し、集計された。選考委員会では、この集計結果を基に審議を行い、下記２編の論文を受賞論文と決定した。

◆　尾崎　由佳著「接近・回避行動の反復による潜在的態度の変容」第45巻第１号掲載
受賞理由：カードを手前に置くという接近行動が潜在的態度に影響するという興味深い知見を発見した、厳密な実験社会心理学的手法に立脚した論文であり、Implicit Association Test（IAT）を用いた態度測定の可能性を広げたすぐれた研究であると評価された。

◆　河野　由美著「看護学生の入館体験による死観の変化－Death Educationの効果に関する準実験的研究」第45巻第１号掲載
受賞理由：看護教育において入館体験を導入した教育効果を、死観の変化というデータによって丁寧に実証しており、実践的な価値も高い論文であると評価された。

****

★☆　受賞者の声　☆★

◇　尾崎　由佳（東海大学チャレンジセンター）

私の好きな言葉のひとつに、"Make every negative a positive. Make every obstacle an opportunity."　というものがあります。そんな生き方がしてみたいという憧れを込めて、座右の銘としています。しかし、座右の銘というものは、ときおり自省しつつ追い求めていなければ、なかなか近づくことのできないもののように思えます・・・。そこでこの機会に、受賞した研究にこの言葉をあてはめることはできるでしょうか？と自省してみることにいたしました。

まず、後半の"Make every obstacle an opportunity"という点について。今回の研究は、当初、予測どおりの結果を得ることはかなり困難なことに思えました。なにしろ、カードを分けるという単純作業を繰り返すだけで潜在的態度が変容するという、一見すると不可思議な予測です。本音を言ってしまいますと、そんな現象をとらえることができるのだろうか？と私自身も半信半疑ながらトライしてみたというのが正直なところなのです。ですから、データ分析から仮説を支持する結果が出てきたときには、「本当にこんな現象が生じるのか」と軽い驚きをもって、しげしげとグラフを眺めてしまいました。そんな一見困難そうな検証ながら、どうにか仮説を支持する結果を得られたという点で、今回の研究はobstacleをopportunityとすることができたのではないかと思います。さらに賞までいただくことは本当に予想外の展開で、これほど素晴らしいopportunityに生まれ変わってくれるとは何とも嬉しいサプライズでした。

しかし、前半部分"Make every negative a positive"はどうでしょう。実は、この研究には大事な課題点がひとつ残っています。もともとの態度を強調する（ポジティブな態度がさらにポジティブに変化する、あるいはネガティブな態度がさらにネガティブに変化する）方向性には有意な効果が見られたのですが、その逆の効果は見られなかったという点です。つまり、もともとポジティブあるいはネガティ

ブだった態度を、低減させたり、逆転させたりという現象は観察できませんでした。つまりは、私の好きな言葉の前半部分「どんなネガティブなこともポジティブに」することは、二重の意味でまだ叶っていないのです。ひとつめのnegativeは、仮説が半分しか支持されなかったということ。ふたつめは、文字通り、態度をnegativeからpositiveに変えることができなかったということ。後者は、偏見解消などにもかかわりうる大事な問題ですから、可能ならば是非とも示したかった効果なのです。

ですから、まだ私の座右の銘は半分しか叶っていないと言えるでしょう。これは是非とも、優秀論文賞というこの上ないopportunityを与えていただいたことを皆様の激励と受け止めて今後も努力を重ねることにより、いつかは "Make every negative a positive." の方も実現させていきたいと願っております。今後も御指導御鞭撻のほどを何卒宜しくお願い申し上げます。そして、もう一度改めまして皆様に心より御礼申し上げます。

****

◇ 河野　由美（藍野大学）

この度、身に余る光栄な賞を頂戴し、驚きと感謝の気持ちで一杯です。受賞という華々しいこととはこれまで無縁でしたので、本当に感無量でございます。今回私の拙稿が賞を頂戴できましたのは、ご多忙の中、非常に丁寧に査読をして多くの適格なご示唆・ご教示を下さった主査と副査の先生方のおかげであると思っております。この場をかりて心より御礼申し上げます。

私事で恐縮ですが、私は看護師として8年間臨床で勤務した後、大学に一から入学し直して大学院に進学しましたので、研究者としての出発は非常に遅い者でございます。今回、賞を賜った論文「看護学生の入棺体験による死観の変化－Death Educationの効果に関する準実験的研究－」は、臨床での看護師の経験から、より良いターミナルケアを行うためにはどのようにすれば良いのか、死に関することを如何にして医療者は学ぶことができ、研究の知見を現場にどのように活用できるのかといった問題意識から研究したものでした。死に関する問題を実証的に研究するには多くの課題があり、いつも自分の未熟さを感じ悩みながら細々と研究して参りましたが、今回の受賞は今後研究を続ける上での大きな励みとなりました。これまでの研究活動に対して最高のご褒美を頂戴したと感じております。これを励みとして今後も一層精進を重ねていきたいと思っております。

最後に誠に僭越ですが、幸いにも院生時代には素晴らしい師からご指導を頂戴することができ、死に関する研究を博士論文にまとめることができました。受賞論文はその博士論文の一部を加筆・修正したものです。院生時代から叱咤激励しながら温かくも厳しくご指導下さった恩師、大阪市立大学金児曉嗣学長に心より御礼申し上げます。

今回の受賞は恩師や査読をして下さった先生方、多くの方々の、お力添えの賜物であると思っております。本当にありがとうございました。

★★　第2回『優秀学会発表賞』決定　★★

「優秀学会発表賞」選考経過と結果の報告

選考委員長　村本　由紀子（横浜国立大学）

日本グループ・ダイナミックス学会「優秀学会発表賞」は、大学院在学中もしくは修了（退学）後5年以内の会員の研究奨励を目的として、昨年度に新設されました。2年目となった今回も、前回同様に多くのエントリーをいただき、誠にありがとうございました。以下、選考経過ならびに結果の概略をご報告いたします。

1. エントリーの受付…大会発表申し込みと同時に行われました。エントリー総数は48本（ショート・スピーチ部門23本、ロング・スピーチ部門4本、ポスター部門14本、English Session 7本）でした。

2. 事前審査…5月中旬から下旬にかけて、論文集原稿を対象とした事前審査が行われました。個々の

選考委員（理事）が部門ごとに優れていると思われる3本を選び、それぞれに1点を与えました。集計の結果、各部門上位3位までの発表16本（ショート・スピーチ部門5本、ロング・スピーチ部門3本、ポスター部門4本、English Session 4本）が、当日審査へと進むことになりました。

3. 当日審査…事前審査でノミネートされた16発表について、大会期間中に当日審査が行われました。１つのノミネート発表につき3人の選考委員が審査を担当し、研究内容・プレゼンテーションのそれぞれについて、5段階で評価を行いました。

4. 最終集計…事前審査・当日審査の得点を併せた最終集計の結果、部門ごとに最高点を獲得した以下の5発表が、選考委員会での審議を経て、第54回大会の優秀学会発表賞に輝きました（ショート・スピーチ部門では2名が同点受賞）。

＜ショート・スピーチ部門＞
◆原田　知佳「自己制御モデルによる反社会的傾向の予測：self-regulationの気質レベルと能力レベルに基づく検討」（共著者：吉澤寛之・吉田俊和）
◆橋本　博文「デフォルトの適応戦略としての文化特定的行動」（共著者：山岸俊男）
＜ロング・スピーチ部門＞
◆清水　裕士「葛藤解決方略としての社会規範：相互依存性理論に基づく理論的考察」（共著者：小杉考司）
＜ポスター部門＞
◆吉澤　寛之「社会環境が社会的行動に及ぼす影響(1)：集合的有能感及び共同体暴力経験が社会的情報処理に及ぼす影響」（共著者：海上智昭・原田知佳・朴賢晶・中島誠・尾関美喜・吉田俊和）
＜English Session＞
◆五十嵐　祐「Culture、 trust、 and social networks」（共著者：Yoshihisa Kashima、 Emiko Kashima、 Tomas Farsides、 Uichol Kim、 Fritz Strack、 Lioba Werth、 & Masaki Yuki）

なお、受賞者は、受賞した内容に関する論文を第１著者として『実験社会心理学研究』に優先的に投稿する権利を有します。すなわち、「特別論文」に準じて、主査および副査１名で審査を受けることができます。ただし、投稿の権利は、メールマガジンJGDA Flash上での受賞発表日（2007年7月4日）から１年間に限って有効です。優先投稿を希望する受賞者は、2008年7月4日までに編集事務局へ原稿をお送りください。

****

★☆　受賞者の声　☆★

◇ ショート・スピーチ部門：
原田　知佳（名古屋大学大学院教育発達科学研究科）
この度は、優秀学会発表賞を頂くことができ、大変光栄に思います。今回発表させていただいた研究は、自己の欲求や意思に基づいて自発的に自己の行動を制御・調整する能力である自己制御（self-regulation）が、社会的迷惑行為や非行等の逸脱行為といった反社会的行動傾向にどのようなプロセスを経て影響を与えているのかといったことについて検討したものです。具体的には、自己制御の個人差に着目し、脳科学的基盤が仮定されている“気質レベルの自己制御”と成長の過程で身につく“能力レベルの自己制御”の両者に同時に焦点を当て、迷惑行為と逸脱行為に及ぼす影響プロセスの共通点・相違点について議論させて頂きました。これまで、自己制御に関する研究は非常に幅広い分野で検討がなされているにもかかわらず依然として不明確な部分も多く残されており、また、幅広い分野で扱われているがゆえに未だ整理されていない部分もあり、自己制御は今後の課題が多く残されている概念でもあります。近年では、神経画像技術や脳波検査等の急速な発展により、自己制御に関する新たな知見が多く得られてきてはおりますが、そのような神経生理学的アプローチによる知見のみでは、実際の現実場面で

の行動にどう影響しているのかといった生態学的視点からのメカニズムの解明にはまだまだ弱い面があることは事実であり、だからこそ、心理学的知見との結びつきが重要であると考えております。今後、自己制御関連研究がより一層活発になることを願うと同時に、私自身も今後の自己制御研究に少しでも貢献できるよう、研究に精進していきたいと思います。末尾ではありますが、助成をして頂いた社会安全研究財団、ご指導いただいた諸先生方ならびに諸先輩方、そして、調査にご協力くださいました皆様に、この場を借りて心より御礼申し上げます。

****

◇ ショート・スピーチ部門：

橋本　博文（北海道大学大学院文学研究科）

この度、優秀学会発表賞という栄誉ある賞をいただき、大変うれしく、光栄に存じます。本発表では、Kim & Markus (1999) のペン選択実験によって示された結果 ― 5本のペン（1本だけ違った色で残り4本は同じ色）のうち1本を選択する場合、欧米人は少数派のペンを選択しやすい一方、東アジア人は多数派のペンを選択しやすい― に着目し、この実験結果を、欧米人と東アジア人それぞれに内面化された選好の文化差として解釈するよりも、それぞれの社会に生きる上でのデフォルト戦略の文化差（より正確には社会差）として解釈する方がより妥当であることを明らかにしました。本研究の2つの実証研究が示すのは、東アジア人の多数派ペン選択行動は、東アジア人の同調性への選好を反映しているのではなく、東アジア社会特有の制度（ =悪い評判がたつことで、属している集団から排除されることによる損失があまりに大きい社会）のもとでの、他者からの否定的な評価を避ける適応的なデフォルト戦略の反映である、ということです。そして、本研究から示唆されることとして、文化に特定的とされる行動傾向の多くは、人々がおかれた特定の「制度」のもとでの適応戦略として説明可能であるという点を強調しました。もちろん、このような制度の観点から文化特定的行動を説明する「制度アプローチ」の試みは、理論的にも、実証的にもまだまだ多くの課題を抱えています。今後、今学会でさまざまな方々からいただいたご指導、ご意見をもとに、この課題をひとつひとつクリアしていくことで、文化研究に対する新たな視点を提供できればと考えております。

最後になりましたが、本発表についてご選考いただきました審査員の先生方、そして本発表に対するご質問、ご指導を頂戴いたしました諸先生方に感謝申し上げます。まだまだ未熟な身ではありますが、この受賞を励みとして、研究に精進していく所存です。

****

◇ ロング・スピーチ部門

清水　裕士（大阪大学大学院人間科学研究科）

この度は名誉ある賞をいただき、大変光栄に思います。また、われわれの研究を評価していただいた審査委員の先生方をはじめ、学会当日に有益なコメントをいただいた方々に感謝いたします。

今回発表させていただいた研究は、人々が対人行動の適切さをどのように判断しているのかについて、Kelley & Thibautの相互依存性理論とLuhmannの社会システム論を援用し、理論的に展開したものです。行動の「適切性」は、個人がそれによってどれだけ利益を得たかという「効果性」とは異なり、それが人々に受け入れられるか、つまり社会規範と密接に関わる概念です。本研究では、ゲーム理論におけるどのような方略が適切であると判断されるのかについて、パレート原理を出発点に考察していきました。

結論として、人々はパレート効率性を導く4つの方略（利他、互恵、役割、受容）を適切と判断し、葛藤構造と社会関係によってそれらが弁別されているという仮説を導きました。またこの仮説から、人々は行動の帰結ではなく行動の選択が評価の対象とされること、そして行動の適切さは一つの判断基準で行われているわけではないことが示唆されました。

ゲーム理論の研究は数多くなされていますが、相互依存性理論は近年ほとんど注目されていませんでした。それにもかかわらず、私の先輩であり共同研究者である小杉氏と「この理論には何か秘められているはずだ」と議論に議論を重ね、今回の発表に結びつきました。生意気な後輩と真剣に議論ができる小杉氏の度量の深さがなければ、本研究が公にされることはなかったと思います。

実証的研究が重んじられる中、本研究のような理論研究が評価されたことは大変うれしく思います。今後もこの受賞を励みに、さらなる論考と実証研究を進めていきたいと思います。

****

◇ English Session

五十嵐　祐（日本学術振興会、 大阪大学大学院人間科学研究科）

この度は優秀学会発表賞を頂き、大変うれしく思います。私にとって、研究とは決して自己満足で終わるものではなく、やはりその成果がどのように受け入れられるかということが、モチベーションを保つのに重要となってきます。今回、このような形で評価を頂けたことは、今後の研究生活において大きな励みになります。

本研究では、一般的信頼感と個別的信頼感（関係性自己）が自己中心ネットワークの構造的側面に与える影響を、オーストラリア、イギリス、ドイツ、日本、韓国の5カ国で比較し、検討を行いました。従来の文化心理学的の枠組みでは、西洋文化と東洋文化を二項対立的に捉える傾向が強く、文化の共通性、多様性に注目した検討はあまり行われてきませんでした。本研究の結果から、5カ国それぞれの人々が、信頼感やネットワーク構造などさまざまな面で異なることが明らかとなり、文化と人々の行動との関連について、従来の枠組みを超えたより多面的な検討を行う必要性が示唆されたと思います。また、自己中心ネットワークの構造指標を用いた本研究のアプローチが、個人の心理的側面と社会的ネットワークの構造的側面との相互関係を分析する、ひとつの参考になればと思います。

最後になりますが、本研究は、メルボルン大学の嘉志摩佳久先生が各国の研究者と共同で行ったプロジェクトにおいて、私が社会的ネットワークに関するデータ分析を担当し、まとめたものです。このような大規模なプロジェクトに関わる貴重な機会を与えていただいたことに、心より感謝いたします。また、審査員の先生方、発表を聞いてくださった皆様にも、心よりお礼申し上げます。

****

◇ ポスター部門：

吉澤　寛之（岐阜聖徳学園大学教育学部）

今回は、このようなたいへん名誉ある賞をいただき、光栄に存じます。自らノミネートをしておいてなんですが、先駆的な試みである我々の研究に賞をいただけるとは思っておりませんでしたので、恐縮しております。郵送で送られてきた賞状とホルダーの豪華さに圧倒されつつ、受賞の喜びをかみしめております。

近年の社会的な問題行動の背景には、従来の研究で主に扱われてきた家庭環境や友人・仲間集団など身近な他者からの影響だけではなく、よりマクロな地域共同体や社会全体からの影響が存在することが指摘されています。これら社会環境的なリスク要因としては、従来から社会経済的地位などの社会資本の低さというハードの側面が主に取り上げられています。しかし、近年の社会環境の変化を鑑みますと、それら社会を構成する成員のこころ（社会認識）の問題というソフトの側面にも問題があるように思えます。住民どうしが連携して地域社会で起こる問題に対処しようとする気持ちが低下している、地域全体として子どもを育てようとする雰囲気がなくなってきていることは、改めて指摘する必要がないほど当然のことになっているように思えます。

この研究では、子どもの社会化を担うべき社会環境のあり方を検討するために、「集合的有能感」という概念を取り上げ、社会化の各指標との関連を調べました。「集合的有能感」とは、近隣の住人が居住者の共通の価値観を認識し、効果的な社会的コントロールを維持するうえで、自分たちがどれだけ有能であるとかという感覚を意味しています。子どもの社会化を望ましい方向へ導くためには、そのための具体的かつ適切な方法を大人たちが知っていることは大切ですが、その前提として自分たちで何とかできるという有能感を持ち合わせていることが欠かせないと考えられます。

最後になりましたが、我々の発表をお選びいただいた審査員の先生方、発表時にたいへん有益なコメントをいただきました先生方に、この場をお借りしてお礼申し上げます。

★★　AJSPからのメッセージ　★★

グローバリゼーションに伴い、全世界的全人類的な視点無しには、現代文化・社会の様相と人間行動を語ることは出来ないでしょう。日本の政治、経済政策は、国内だけではなく、様々な国際関係にも影響を持ちますし、また欧米だけでなく、中近東やアフリカ諸国の政策や、政治経済動向が、日本国内の状況にも影響を与えています。特にアジアは、中華人民共和国とインドという、現在急速に変化している近未来のスーパーパワーを擁した、世界の中でも特に注目を浴びている地域です。現代の日本に大きな影響を与えるであろうことは容易に想像がつきます。とはいえ、一口にアジアといっても、中国、台湾、南北朝鮮など東アジアの隣国や、東南アジアおよび南アジアと、様々な文化、社会を含んでいます。その多様なアジアの人々はいったいどんな問題に直面し、どの様な文化、社会を背景に生活しているのか？そもそも、アジアという広大な地域に共通する社会心理学の視点というものが存在するのか、また存在し得るのか？そういった問いに答えるために、全人類的な普遍性を視野に入れつつ、アジアの特殊性をしっかりと踏まえ、従来の社会心理学の枠にとらわれない、新しい社会心理学を模索することを目的としてアジア社会心理学会（Asian Association of Social Psychology）が結成されました。学会発足に際し、社会心理学の先進国といえる日本の研究者諸兄の参加を期待しつつ、アジア各地の多彩な社会心理学者たちの対話を促進する場として、日本グループ・ダイナミックス学会と共同で刊行されたのがAsian Journal of Social Psychology（AJSP）です。

社会心理学は、言うまでもなく、第二次大戦後のアメリカ合衆国で学問分野として確立されました。社会心理学の父といえるような研究者たちは、ほとんどがアメリカの大学でその研究生活を送りましたし、社会心理学の理論もほとんどが、アメリカで発達したものです。このような歴史を背景として、現在の社会心理学は基本的にアメリカ文化、社会に基づいた研究対象、研究手法、理論的枠組みを積み上げてきました。過去四半世紀には、ヨーロッパにもヨーロッパの歴史社会に特殊な社会心理学を発展させようという動きが起こり、いま欧州各国にも独自の社会心理学が展開していることは、衆知のことと思います。しかし、アジアは、言語、文化、そして慣習のどの側面をとっても、ヨーロッパ以上にアメリカとはかけ離れています。特にアジアの研究者にとって、言語の厚い壁があります。たとえ言葉を自由に操れたとしても、アジアの文化と社会という現状を熟知しない欧米の研究者に、アジアに特異な問題意識をコミュニケートし、さらにその重要性を説得するのは至難の業です。このような困難を克服すべく、AJSPは、アジア社会と文化を基盤とする社会心理学のアジア唯一の国際的学術誌として、日本を含めたアジア各地の文化や社会に根ざした研究を世界に発信する役割を果たしてきました。

発刊１０年、AJSPはアジアの特殊性を強調する研究だけではなく、汎アジア的な、さらにはより普遍的な社会行動の実証的、理論的成果を発表する学術誌へと発展してきました。ある意味で、アジアの世界における重要性が増せば増すほど、アジアの文化社会を見据えた社会行動の研究が重要性を増すのは当然といえるでしょう。しかし、そうした世界情勢だけでアジア社会心理学の発展を説明できるのでしょうか？それだけではなく、アメリカという、あるいはヨーロッパという、特殊な文化社会的背景では見えにくい社会現象に、アジアの研究者たちは敏感に反応しているように思います。しかも、アジアで特に見えやすい、あたかも文化特殊にみえる社会性に、実は全人類的に当てはまる普遍性があるのではないでしょうか。私には、そこにAJSPの特殊性と普遍性の弁証法と、近年の発展の源があるように思われてなりません。そして、この特殊性と普遍性の狭間に生じる創造性を掬い上げ、切磋琢磨し,世界に送り出すことがAJSPの編集長としての自分のつとめだと思っています。

具体的には、英語を母国語としない研究者の実生活に根ざした研究を、より普遍的、世界的に発信するために、次のような配慮をしています。

１．論文投稿一週間程度の間に、編集長が当該論文の適切度を判定し、著者にフィードバックを送る。
２．出来る限り、研究国でのその分野の第一人者と世界的な研究者を審査者とすることにより、研究国の特殊な状況と、より普遍的な視野が審査に反映されるようにする。
３．掲載が決定した場合、論文の内容だけではなく、フレーミング、英語表現等についてもアドバイスをする。

４．掲載されない場合でも、より建設的な、将来の研究に役立つフィードバックに心がける。

一言で言えば、AJSPはアジアの研究者と世界のコミュニケーションを援助するための発信、増幅装置のようなものです。当然のことですが、研究論文が投稿されない限り、この装置は働きようがありません。投稿論文が増えれば増えるほど、AJSPの質もさらに向上し、掲載論文の重要度も、世界の研究者からの注目度も増大します。それによって、研究の影響力も上がるわけです。個人的な感想ではありますが、AJSPの掲載論文の質、量ともに近年の向上はめざましいものがあるとおもいます。実際、雑誌のいわゆるimpact factor にもそれが反映されています。日本からさらに質の高い、独創的な研究論文が投稿されてくるのを期待しています。そして、AJSPが、グループ・ダイナミックス学会の研究者にとっても使いやすい、世界へのゲートウエイとして発展していくことを祈念してやみません。

メルボルンにて、

嘉志摩佳久

★★　事務局からのお知らせとお願い　★★

◆　以下の４名の先生が、名誉会員に推戴されました。
蜂屋　良彦　先生、黒川　正流　先生、佐藤　静一　先生、白樫　三四郎　先生

◆実験社会心理学研究の特集テーマ募集
「実験社会心理学研究」には、グループ・ダイナミックスや社会心理学に関連する特集を掲載します。特集は、読みごたえのある論文３編程度で構成します。特集についての企画をお持ちの会員は、企画の趣旨、特集論文の概要等をまとめた企画書（Ａ４版１－２枚程度）を、編集委員長に提出して下さい。企画の採択については、常任編集委員会で審議、決定します。特集論文の審査手順など詳細については、学会ホームページに掲載してあります。URLは、http://www.groupdynamics.gr.jp/tokusyu.htmです。ご参照ください。
なお、「実験社会心理学研究」は、特集の掲載によって、一般投稿論文の掲載に大幅な遅滞が生じないことを重視しています。企画を提出される方は、この点をお含みおき下さい。

◆実験社会心理学研究の書評候補募集
事務局では、実験社会心理学研究の書評の候補となる著作を随時募集致しております。よい本がありましたら事務局までご推薦ください。

☆☆　広報担当からのお知らせ　☆☆

◆JGDA_Flash：グルダイでは【日本グループ・ダイナミックス学会　広報（速報）メールマガジン】（JGDA_Flash)を運用しています。これは、速報性が要求される情報・ニュースを会員のみなさまにe-mailでお知らせしようとするものです。現在登録されている会員は約６００名です。グルダイ会員のみなさまの中には、会員名簿にメールアドレスを掲載されていない方や最近アドレスを取得された方、またアドレスを変更された方なども少なくないのではないかと思いますが、登録、メールアドレスの変更、配信停止の連絡、マガジンに関するご希望・お問い合わせ等は、以下のアドレスのグルダイ広報メールマガジン運営担当マスターにお願いいたします。

office@groupdynamics.gr.jp

また、新刊案内や研究会案内等のニュース記事も大歓迎いたします。同アドレスまでお送りください。なお、これまでに配信されたFlashは、以下のWEBで閲覧可能です。

http://www.groupdynamics.gr.jp/cgi-bin/magbbs.cgi

☆☆　*グルダイ学会関係連絡先*　☆☆

本学会では、事務支局を中西印刷株式会社に開設しております。入退会、住所・所属等変更、会費納入、機関誌・ニュースレターの未着・メールマガジンなどのメール配信先の登録・変更・停止等の連絡先は、事務支局である中西印刷株式会社までご連絡ください。各種お問い合わせの具体的な連絡先は以下の通りです。

◆【事務支局】住所・所属変更、その他お問い合わせは、
中西印刷株式会社 学会部　（日本グループ・ダイナミックス学会担当：岡田）
〒602-8048　京都市上京区下立売通小川東入ル
TEL: 075-415-3661　　FAX: 075-415-3662　　e-mail: jgda@nacos.com

◆投稿論文の送付、機関誌編集に関する問い合わせ、その他学会運営に関するご意見は、
「実験社会心理学研究」編集事務局
広島大学大学院総合科学研究科行動科学講座　浦研究室内
〒739-8521　東広島市鏡山1-7-1
Tel/Fax:　082-424-6576 e-mail jjesped@hiroshima-u.ac.jp

◆ぐるだいニュースの編集・記事の投稿、メールマガジンへのニュース記事投稿、新刊案内や研究会案内等のニュース記事、公募情報などは、
静岡県立大学看護学部　西田公昭研究室
〒422-8526　静岡市駿河区谷田52-1　Fax：054-264-5099
E-mail：office@groupdynamics.gr.jpまでお送りください。
また、マガジンに関するご希望・お問い合わせ等も、同アドレスまでお送りください。

◆学会事務局
愛知淑徳大学コミュニケーション学部コミュニケーション心理学科　斎藤研究室
TEL: 0561-62-4111（代表）／FAX: 0561-63-7734（学科準備室）
E-mail: sec-general@groupdynamics.gr.jp

◎（編集後記）　この度、学会運営のお手伝いをしてみるようになって、いわゆる“裏方”の動きを知りました。いやぁ、結構たいへんです。というわけで本誌編集においても何かヘマをやらかしたとしてもどうかお手柔らかに願います。ときに夏本番ですが、どなた様にもご自愛いただき、元気にお過ごし頂きますよう切に祈っています。そういう私は、おいしいビールを頂くグループ・ダイナミックなアクションリサーチで乗り切る所存です。（編集子）